富岡多惠子

とりかこむ液体

とりかこむ液体

富岡多恵子

とりかこむ液体

一九八九年十一月十五日　初版第一刷発行

著者――富岡多恵子
発行者――関根栄郷
印刷――明和印刷
製本――積信堂
発行所――筑摩書房
住所　〒一一一　東京都台東区蔵前二―六―四
振替　東京六―四一二三
電話　営業〇三―五六八七―二六八〇
編集〇三―五六八七―二六七〇
FAX　営業〇三―五六八七―二六八五～六
編集〇三―五六八七―二六八七～九
©Taeko Tomioka　1989　Printed in Japan
ISBN4-480-80287-8　C0093
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

とりかこむ液体 3
噴出する水 23
森 99
運否天賦 121
横たわる川 141
松拍 161

とりかこむ液体

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とりかこむ液体

膝くらいまである水を、押しのけるように歩いていく。水が腰よりも上ならば歩くことはできないだろう。苔の色をした不透明な水を越えて、やっと彼女の家に着いた。

家は地面に這うように平べったく、遠くから見ると土地の起伏に溶けこんでいて、建物があるように思えなかった。

十三歳になるという女の子が家の外壁を背にして立っていた。わたしを出迎えているつもりなのかも知れない。細面の顔は、写真で見た彼女の父親とよく似ている。

「母はおりませんので、代りにお話を伺います」と女の子は抑揚のない声でいった。

わたしは彼女の母親にも特に話すことがあってきたわけではないので、娘にそういわれて困ってしまうのだった。しかし、ちょっと通りがかりに立ち寄ったというには、彼女たちの家の敷地は広すぎるのである。その不思議なほどの広さは、近在のひとびとの謎になっていたが、娘の父親だった男が今でいう「土地ころがし」で儲けた金で買ってあったものらしい。そういう「真相」も、ここに彼女がいることも、その男についても、最近或る雑誌で知った

のだった。

先程、母親の代りに話を伺うといった女の子が十三歳であるのも、その雑誌で知ったのである。雑誌で、かれらの事情を喋っていたのはTという男で、おそらくもう八十くらいの老人であった。

T老人はまず自分のことから喋りだしていた。よくある「立身出世物語」のパターンで、高等小学校を出て上京し、商店での丁稚奉公のあと、さる先生のところで書生をする。さる先生というのが右翼のエライひとで、その先生の友人である侠客に見こまれ、そちらの方で名をあげるが、先生が見せてくれた禅坊主の書に心を洗われてカタギになると誓う。読んでいると、まるで昔の芝居か映画の筋書きで、どこまでがホントかわからないのだが、喋っている本人の楽しそうな様子は察せられるのである。

Tさん（当時はまだ老人ではないわけだから）は或るとき、かつて心を洗ってくれた禅坊主の書と同じくらいに心を動かされる書に出会った。それはFという男の書だということだった。Tさんは早速Fさんに会いにゆく。そのあたりからやっと、目の前にいる女の子と関連する話になってくるのだったが、T老人の語り口から想像された世界と、女の子やその背景となっている家はかなり雰囲気がちがうのである。それでわたしは、「ここはFさんのお宅ですよね」などとトンチンカンなことをいってしまったのだった。「ちがいます」と女の

子はきっぱりといった。

わたしは女の子を傷つけてしまったのである。T老人は自分の娘がFの子供を生んだとはいっていたが、娘がFと結婚したとは喋っていなかった。「とにかくFは女にもてるんだ、われわれから見ると特にいい男でもないんだが。これだけはわからんものでね、女はみなコロッとまいってしまうんだから、うちの娘もFの子供を生んで、その子がもう十三になるんだ」というような話し方だった。

「またそのうちに立ち寄ってみますから、お母さんによろしくね」と、わたしはバッが悪いので帰ろうとした。「母はおりません」と女の子はいった。「お母さんのおられるときに、またきますから」というわたしを、「母はここにいないといってるんです」と女の子は遮った。「ああ、ご旅行――」「死んだんですよ」

わたしは今どき風に「ウッソー！」と叫びそうになったが、これ以上女の子に馬鹿にされてはたまらないと、苔色の水のなかを、まさに転びつまろびつという態で逃げた。母親が死んだと娘がいっているのに、彼女への同情よりも、あまりに何度も見当はずれなことをいったので、小娘に馬鹿にされたという思いの方が強かったのである。

T老人の喋っていたのは、あれはなんだったのか。銀行で待っているときに、なに気なく手にした雑誌でたしかに読んだ――。T老人の写真はなかったが、四十になったばかりで死

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んだという、Fなる男のポートレイトはあった、彼の「書」の写真と並んで――。そのFなる男のポートレイトを見るのははじめてだったが、見た瞬間、不思議にひきつけられるものがあり、それでそこに出ていたTさんの聞き書きをまとめたものらしいお喋りを読んだのだった。そして改めてFなる男の写真を見て、なるほどTさんのいう通り、これはまさに女に好かれるタイプだと、自分が不思議にひきつけられたことを棚にあげて、おおいに感心したのであった。そして、こういう男にあのY子さんもやられたのか、と他人事であるがゆえにさらに感心したのであった。Fなる男の写真にひきつけられなければ、T老人がY子の父親だとは知ってはいてもわざわざメガネをとり出してまで読みはしなかっただろう。

Y子は父親を嫌っていた。T老人の「立身出世物語」を読んで、彼女の嫌悪がわかるような気がするのだったが、当時はわからなかった。むしろY子の裕福そうな環境がうらやましかった。彼女は小さいときから踊りを習っていて、その発表会のようなものに招待されたことがある。ひときわ派手なY子の衣裳。Y子のためにきてくれたひとびとへの、あきれるばかりの豪華なお弁当やおみやげ。父親はそこにいなかったが、小柄な母親は「玄人」風の美人で、着物の好み、着方、物腰、いずれも「玄人」風。T老人のお喋りを読んだあとでは、若いころのTさんの好みが「玄人」風もしくは「玄人」の女性だったのは当然という気もするが、そのときはわからない。とにかくその踊りの会でのY子は、彼女自身は素人のお嬢さ

んの感じなのに、とりまくひとたちがみな「玄人」風なのであった。しかし踊りそのものは、素人が見てもお嬢さん芸を超えているのは明らかで、気迫さえ感じさせた。そのころ、つまり二十代のはじめに、Y子がすでに舞踊家として立とうとしていたのかどうか。彼女のリサイタルの広告を見たのはそれから十年くらいたってからである。

苔色の水から遠ざかるにしたがって、あの女の子にいっぱい食わされたのではないかと気がつく。T老人のお喋りはせいぜい二ヶ月前、雑誌が急いで聞き書きをとったとしたらもっと現在に近い過去である。そのT老人はひと言も娘が死んだなんていってない。もしY子が本当に死んだのだとすれば、ごく最近ということになる。

それにしてもT老人のお喋りはおかしかったと、何度も思い出しているのである。あの女好きのする、悪くいえば女たらしの相をしていたFなる男に、Tさんも翻弄されるからである。Tさんは禅坊主の書と同じくらい、あるいはそれ以上にFなる男の書に感動して近づいたわけであるから当然Fが相当な人格者だと思っていたであろう。人格者でなく、奇矯な人物であるとしても、これほどの書をものする人物なら当然だとの心づもりさえしたであろう。なんらかの思いこみがFなる男に対してはあったと思える。Tさんはまだそのころ海千山千の老人ではなかったのだから。

Tさんが知ったFさんは、人格者でも奇矯な人物でもなかったが、病人だった。子供のと

きから身体が弱く、旧制の中学校を結核で中退し、そのあとも療養と手術をくりかえす生活だった。ところが、Tさんのいい方によれば「そんなことにおかまいなく女が寄りついてきて」二度だか三度だか結婚し、その間に「土地ころがし」に才能を発揮して大金をつかんだ。勿論ずっと、TさんはFさんにつきまとって作品を書かせた。TさんのFさんの「書」への心酔に「商売」がはいりこんできているのは、Tさんがカタギで生きていく上から当然のことではあった。Fさんは、Tさんが「商売」に熱心になるころには「書」なんてどうでもよくなっていた。しかしTさんの、天才書家Fをつくりあげるプロデューサー及び演出家としての才能はFさんを逃がさなかった。

Fさんが土地を買ったころは、このあたりにはまだ人家もなかったと思うが、今では東京のベッド・タウンの一部になりつつある。しかしY子が住んでいるはずの家（T老人は娘はFの子とK町の広い家にいると例の雑誌で話していたので知ったのである）のあるところを中心に広がるゆるい起伏の丘はおそらく昔のままであろう。その広大な敷地に隣接する林の向こう側に映画の撮影スタジオがあって、林のなかで時代劇のロケをやっているのも、背景になるY子の家の方に電柱がないからだと気がつく。

わたしは撮影スタジオのなかに入ったことはないが、林のなかでのロケは偶然に何度か見たことがある。林道は撮影スタジオの私有地ではないらしく、撮影の邪魔にならないところ

はひとが通る。急がないひとにとっては、その林道は私鉄の駅に出る気持のよい「遠まわり」の道だからである。わたしはそこからY子の家へいこうと思うのだが、Y子の家にいこうとすれば必ず苔色の水がある。その日Y子はいて、苔色の水の向こうで手を振っていた。

やっぱりあの小娘にいっぱい食わされた、と思いながら水のなかを歩く。Y子がずっと手を振りつづけているのが見える。後方が騒がしいので振りむくと、甲冑をつけた男たちが駆けてくる。撮影しているんだと思ってはいても、ヘンな感じだ。それで一刻も早くY子の家にたどりつきたいと急ぐのであったが、水のなかでは走れない。男たちが弓をかまえている。矢を放ちはじめた。かれらがわたしを狙っているように錯覚させる角度である。Y子の方を見ると、早くこいというようにさかんに手を振っている。

やっとY子の手をつかみ、水から這いあがっていくと、「ご近所だったのね」とY子がいった。近くで見るY子の顔は、いつか見た彼女の母親そっくりである。年齢がおそらくあのころの母親と同じくらいになっているわけだから、不思議はないのであるが、一瞬、時制（テンス）の混乱が起きる。

手入れのいい芝生の上を、和服姿のY子と並んで、裸足で、濡れた靴をぶらさげて歩いているわたしは、訪問客というより逃げそびれた泥棒みたいだ。

「広いところにひとりでいるというのは、狭い部屋にひとりで閉じこめられているのと同じ

なのよ」とY子がいうので、「ああ、水のこと――」とわたしは口走ってしまった。「でも、ここへきたのは、わたしが自分から望んでのことだから。だれに命令されたのでも、無理に連れてこられたのでもないの」「お嬢さんがいるんだから、ひとりじゃないでしょう」「娘？ ああ、あの子のこと」「この間きたときに会ったのよ。写真で見たFさんによく似ていて、驚いた」「いやねえ、人間ってだれかに必ず似るんだから。だれにも似ていないってひといるかしら。親が植物で、それで人間に生まれてきたら親には似ていないでしょうね。それしかないわね」「Fさんの作品も写真ではじめて見たのよ」「どう思った？」「顔の方がいいと思った――」とわたしが笑うと、「顔もだんだん下品になったけれど、字ははじめから品がなかった。あなたは正直でいいわ」Y子も笑うのだった。

それからふたりは連れだって長いあいだ芝生の上を歩いた。「写真で、Fさんの水墨画も見たわ。字より、わかりやすいからか、嘘っぽい感じがしたんだけど」とわたしがいうと、「ほんとに正直でいいわ、あなたは」とY子は気持よさそうに笑った。たしかにわたしは正直で率直に話していた。親友でもなかったY子にこんなに素直にものがいえるのは、自分でもおかしかった。「あのね、Fさんの作品の写真を見ながら、どうしてこんなものをあなたのお父さんがいいと思ったのか不思議な気がしたの。Fさんをあなたがいいと思ったのはわかるの」というと「どうして？」と尻あがりにY子は楽しそうに声を揺らめかせる。「だっ

てそうでしょう、Fさんのような男のひとには、女ならだれだってひきつけられるわ。それでいて、ひきつけられながら、どこかでツマンナイ男だなあと思っているんじゃない？」

「あなた、いいたいことハッキリいうわね」とY子は笑った。ふたりは長いあいだ芝生の上を歩いていた。雨がつづいたあとの晴天なので、芝生はつやつやしていた。時折、暖かい日ざしのなかを冷たい風が通りぬけ、人間の肌をこわばらせた。ふたりはかなり長いあいだ芝生の上を歩いていた。

「あなた本当にFの作品はつまらないと思った？」とY子は透明な声でいった。空色の、トンボの羽みたいな着物のたもとが揺れたような気がした。「つまらないと思ったわ」とわたしはまた正直に答えた。それはわたしの個人的な感想だった。だから、Fさんの「書」に感動するひと、好きなひとがいて当然であった。しかしわたしは「好きではない」とはいわず、「つまらない」と正直にいってしまった。

芝生の起伏のなかに、はじめて大きな樹木があった。したたる若葉をわたしはしばらく見とれていた。そして気がつくと、Y子は衣裳を替えて木の根元にいた。着物の色も模様もちがっていた。「ひきぬき」みたいに、着物に仕掛けがしてあったと思わせる「早替り」であった。わたしはY子の踊りは、あの発表会のときに見ただけである。

着物が替わったことなどどうでもいいような感じで、Y子はなおも芝生の上を歩いていく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com